

編 集 後 記

日本人は皆、王様？

山形大学医学部 副学部長

山形大学医学部紀要（医学）編集委員長 木 村 理

（山形大学医学部外科学第一（消化器・乳腺甲状腺・一般外科）講座 教授）

私のVater Professor（Alexander von Humboldt奨学生でドイツ留学中、指導者としてドイツ・ヴュルツブルク大学でいっしょに考えた実験結果をいっしょに論文にした人）、Moessner教授を山形で行われた第43回日本脾臓学会大会の特別講演に招待した。一緒に乗った帰りの新幹線で、メスナー教授が「日本人は皆、王様？」とつぶやいた。彼はドイツ内科学会の重鎮で、現在の赴任地Leipzig大学からBerlinに月に1回の会議で行くという。

そのときの理事会室近くにあるトイレットがウォッシュレット付きだというのである。月に1回Berlinに行ったときは王様になったような気がするそうだ。

また最近日本で新築されたりしたビルや飲食店、テナントなどでWashlet付きのトイレが多くなっている。改装している場合も多い。これはたいへんうれしいことであり、たしかにWashletの後のおしりのさわやかさは王様になった気持ちかもしれない。

それとともに肛門の病気もへりつつあるのではないか。肛門出口を紙でふいても、便は粘膜上皮のひだからすべておちるわけではなく、そのままほっておいたら感染に陥る可能性もあるだろう。

紙でふく機械的刺激で肛門が傷つきそこから感染するおそれもなくなる。

内外痔核、痔瘻等がWashletによって少しでも減ってくれることを願っている。

もちろん痔核（hemorrhoids）は静脈叢であり、痔瘻の一次口は直腸の円柱上皮が扁平上皮とぶつかる歯状腺にあるので、それらの発生病理はいまだ不明な点もある。Washletによる清潔がどれだけ内外痔核、痔瘻に影響するかわからないが、たとえ何らかの原因でできてしまってからでも、局所を清潔に保つ効果は絶大であろう。

通常、紙で便をふきとるとくこれは“ぬぐう”行為である。つまり多くのものは除去しても肛門の皮膚についたものがすべてきれいにとれられる訳ではない。うすくてもその場にぬりたぐられてるものである。これを“なびる”と言う地方もある。

実際、痔瘻に対するSheaton法（痔瘻の中にペンローズドレーンなどを通して留置しておく方法）術後には、以前は局所を洗面器の水で一日何度も洗うようにしていた。この治療的行為はWashletの普及により、より簡便なものになっていることは事実であろう。